

❖ 第6回近現代史シンポジウム ❖

テーマ：「大東亜共栄圏を考える」

— レジメ集 —

時 期：2015年2月27日（金）

13：00～17：00

場 所：国士舘大学世田谷キャンパス

梅ヶ丘校舎34号館301教場

講 師

- ・ 富澤 暉先生（東洋学園大客員教授）
- ・ 小林道憲先生（哲学者）
- ・ 戸部良一先生（帝京大教授）
- ・ 笹島雅彦先生（読売新聞調査研究本部）

主催 公益財団法人 偕 行 社
日本危機管理学会

＜シンポジウム実施の主眼＞

大東亜共栄圏の目的は何であったか。それは、欧米が保持したアジアの植民地をそれぞれの民族に解放し、アジア各地域の独立を目指し、日本を盟主としてアジア地域に新しい国際秩序を築こうとしたものである。本シンポジウムは、それに焦点を当て新しい発掘資料も参考としつつ検討を加えることを主眼としている。

「大東亜共栄圏」とは何か

本日のテーマであります「大東亜共栄圏」について、若干の説明をさせていただきます。「大東亜共栄圏」という言葉は、現在は、歴史上の意味しか保持していませんが、大東亜戦争の最中は、戦争の目的としてアジアに植民地等を保有する欧米先進国を駆逐し、アジア地域を解放するという大きな意味を持っていました。そして、アジア地域に日本を盟主とする新しい国際秩序建設を目指したのが「大東亜共栄圏」でした。その淵源を辿れば、満洲事変から支那事変に至る日本の対中政策に求められますが、1938年11月3日、第1次近衛内閣によって発せられた「日満支の緊密な提携に基く東亜新秩序声明」が出発点と考えてよいでしょう。その後、第2次世界大戦が勃発し、当初は枢軸国側の連合国側に対する圧倒的勝利が日本の為政者に大きな影響を及ぼし、東南アジアの植民地宗主国の弱体化から、にわかに南進政策が台頭し、1940年7月26日、第2次近衛内閣の閣議において「基本国策要項」の中に「英仏蘭葡植民地を東亜新秩序内に包含すること」が謳われました。そして、その年の8月1日には、松岡外相が新聞記者への談話の中で「大東亜共栄圏」という言葉を公に使用しそれ以来、「大東亜共栄圏」は日本の基本的対外国策を表現する公式のスローガンとして終戦まで使用されました。

(文責：松田研究員)

❖シンポジウムの進行予定❖

* 13 : 00 ~ 13 : 05 開会の辞

主催者代表挨拶 : (公財) 偕行社理事長 : 志摩篤氏

* 13 : 05 ~ 13 : 10 特別講演者紹介

近現代史研究委員会委員長 : 中山隆志氏

* 13 : 10 ~ 14 : 00 特別講演

演題 : 「F機関・藤原岩市を巡る大東亜共栄圏」

(東洋学園大客員教授・富澤 暉先生)

休憩 (10分)

* 14 : 10 ~ 14 : 15 パネリストご紹介

近現代史研究委員会委員長 : 中山隆志氏

* 14 : 15 ~ 15 : 35 パネリストご発表

(戸部 良一先生 : 帝京大教授)

(笹島 雅彦先生 : 読売新聞調査研本部)

(小林 道憲先生 : 哲学者)

休憩（１０分）

（ご質問票を回収させていただきます。）

* 15 : 45 ~ 16 : 00 コメンテーター討論
（池田十吾 国土舘大学政経学部教授）

* 16 : 00 ~ 16 : 30 パネリスト討論
（司会：池田教授）

* 16 : 30 ~ 16 : 55 ご質問への回答
（パネリスト・コメンテーター等）

* 16 : 55 ~ 17 : 00 閉会ご挨拶
日本危機管理学会会長：池田教授

* 17 00 閉会の辞（司会者）

富澤 暉先生特別講演

演題：F機関・藤原岩市を巡る大東亜共栄圏

❁ 富澤 暉 先生のご経歴

防衛大学校卒業後、陸自一般幹部候補生学校を終了し、3等陸尉に任官する。陸自職種は機甲、戦車小隊長を振り出しに全国各地で勤務する。北海道富良野では第2師団戦車大隊長を務める。その後、松本駐屯地の第13連隊長、練馬駐屯地の第1師団長、陸幕副長、北部方面総監等の要職を歴任し、陸上幕僚長に就任する。退官後、公益社団法人隊友会理事長、川崎重工業（株）顧問を務め、近時は東洋学園大学理事兼客員教授として「安全保障」講座を担当する。なお、実父は、1937年の芥川賞受賞作家であり、ご夫人は、今回のテーマに取り上げた藤原岩市氏のご息女である。

F機関長・藤原岩市を巡る大東亜共栄圏

富澤 暉 (15.02.27)

1. 前 言

- (1) 近現代史研究については全くの素人だが、このシンポは多分3回目。光栄。
- (2) 大東亜共栄圏については不勉強だが藤原については、比較的知っているので
- (3) 「F機関」の行動概略→正論3月号→同台講演録

2. 「義父のこと」より

- (1) 藤原は日本よりもインドで知られているというのは本当か→正論3月号
- (2) 英国探偵局長が「F機関」活動をグロリアスサクセスと褒めたのは真実か
- (3) 藤原が大東亜共栄圏の夢を愚直に信じていたというのは本当か。彼の大東亜の中に中国や印度があったのかは極めて疑問。インパールなど誰も考えていなかった。
- (4) 日本の軍政方針とインド国民軍や地元民等との狭間にあって藤原が苦しんだこと
①華僑対策②兵站③ビハリボース関係④陸軍中央による承認⑤鈴木大佐説得

3. モハンシン将軍の「私の回想」より

- (1) 岩畔豪雄大佐（少将）と藤原の違いについて
- (2) 岩畔氏こそ大東亜共栄圏という言葉の発案者、その岩畔のプロフィール
- (3) チャンドラボースを頭領にしたいと言い出したのはモハンシン
- (4) ビハリボース等在日長期組、と在マレーインド人の葛藤
- (5) 岩畔と藤原の関係…両者はどう言っているか

4. 桑原長氏の「一武人の波瀾の生涯」の一部「忍び哭き」より

- (1) N少佐とは誰のことか…42期・野原博起少佐（大佐）
- (2) 野原少佐は何故哭いていたのか…種村佐考の大本営機密日誌から
- (3) 桑原長：山口出身→広幼→陸士43期→陸大51期→師団参謀→大本営8課→10師団参謀→15師団参謀→7方面軍参謀→徳山市会議員・57年48歳で逝去
- (4) 第8課で藤原の後を継いで「文化宣伝隊」担当、兼ねて大本営報道部員
- (5) 何故この活動は失敗したか、何故ジャバだけは成功したか、町田・今村・高島
- (6) 左遷の原因は「文化宣伝隊」ではなく、報道班員として文句を言いすぎたこと
- (7) この書が出来た経緯、要するに桑原も藤原も昭和22年に口惜しさを書いた？

5. 1～4から見た大東亜共栄圏についての私見

- (1) 開戦前から哲学→概念→政策と一貫して存在していたものではない
- (2) 大東亜会議で後付けされたが実は纏まっていない、満・支と南方と印の分離
- (3) 元々38年の東亜新秩序に40年以降の南方進出を加えたところに問題あり
- (4) 南方へ出た若者達の一部が現地人と心をつなげて実行した成果はある
- (5) 更に検証すべき人物：大谷光瑞・大川周明・スメラ学塾の仲小路彰・小島威彦
- (6) 戦後藤原は印・パ・バン・東南亜・台に良く行ったが中・比には行かず。了

日本で出会うインドの人々に「メイジャー・フジワラ」を知っているか、と聞いてみると、意外にも「ネタージ（チャンドラ・ボース）」と共に戦った日本軍人だ」と正確に答える人が少なからず存在する。しかし現在の日本では、情報（インテリジェンス）に関心のある一部の人を除き「藤原」を知るものはいない。インドでの「メイジャー・フジワラ」はインド独立に絡む歴史上の人物であるが、日本の藤原岩市陸将は、自衛隊の多分千人は超すだろう元将官達の中の一人に過ぎないからだ。

当時弱冠三十三歳の一少佐であった彼が、インドで今なお、知られているという理由はこの『F機関』を読んで頂ければわかる。

「F」とはFreedom（自由）のFであり、Friendship（友情）のFであり、そしてFujiwara（藤原）のFである。この「F」こそが、英国の植民地であったインドを独立させた重要な起爆剤であったと認識するインド人・英国人が今なお、居るのである。

この書のハイライトともいえるべき場面は読者の好みにより違うのだろうが、私は何といってもクラレンプールで英軍の探偵局長（陸軍大佐）に尋問されるくだりを挙げたい。

「貴官の工作は、真にグローリアス・サクセスであった。しかし、貴官のような語学もできない情報

の素人がこのように成功した理由が分からない。どんなテクニクを使ったのか、その成功の原因について回答してくれ」と言われ、「テクニクなどない、ただ、現地人に対する、敵味方、民族の相違を越えた愛情と誠意を、硝煙の中で、彼らに実践感得させる以外になかった。そして、至誠と信念と愛情と情熱をモットーに実践これをつとめたのだ」と藤原が答えると、その大佐が「解った。貴官に敬意を表する。自分はマレー、インド等に二十数年勤務してきた。しかし、現地人に対して貴官のような愛情を持つことがついにできなかった」としみり語る。その記述の史的裏付けについては歴史研究の成果を待つほかないが、私も藤原を知る者にとっては「いかにも」と頷く場面である。彼は、中国における日本陸軍の失策は二度と繰り返すまいと念じながらも、なおアジア解放・大東亜共栄の夢を愚直に信じていた男でもあった。

軍事情報とは「相手（敵）」の能力（Capability）と意図（Intention）を知ることだとされているが、能力を知ることが比較的易しいものの意図を知ることが極めて難しい。それ故、相手の意図は一般に決めつけられず、多くの場合「我」にとって最悪の場合を想定して作戦に入ることが多い。

そうした情報上の議論を延長して行くと「もつとも効果的な情報手段は『人間交流による情報（ヒューマン・インテリジェンス）』であり、最高の情報とは『相手（敵）の意図を自分の意図に一致させること』である。それが出来た時には戦わずして勝てるのだ。」という結論が出る。

藤原は自らの「魂」によってそれを実行した希有の情報将校として歴史に残る。彼は戦後、陸上自衛隊の調査学校（現在は小平学校の一部）の校長となり後輩情報関係者の教育に当たったが、その教育方針として「智・魂・技」の三文字を掲げた。旧陸軍時代に「魂」だけで務め

た自らを反省し、戦中は敵の英国から学び、戦後は友邦たる米国から学んだ「智と技」を加えたものと思われる。

今なお、小平学校には「智・魂・技」と彫られた石が残っており、情報職種学生たちの指標となっている。

若くして、歴史に残る仕事が出来たということは、上司と部下と友人に恵まれた彼の幸運によるものに違いないが、この書を読めば彼が色々な苦難に苛まれていたことも読みとれる。特に、第一部の後半から第二部の前半にかけて、日本陸軍の軍政方針とインド国民軍や地元民等との狭間にあつて藤原自身が苦しむ姿が浮かび上がる。

「味方の陣営を説得できたとき、異民族工作は成功したも同然だよ」

「参謀本部の命令に逆らつてまでやれなかった。明治維新の志士たちとちがい、官吏だった」

と苦渋をこめながら話した。と、この問題を取材したある著述家が藤原の追悼録に記している。

私は縁あつて、藤原の女婿になつた元自衛官であるが、彼にして「官吏だった」と反省されてはただだ戸惑うばかりである。しかし、陸軍が硬直した大組織になつていた時代と明治維新の時代を比較することには元々無理があるとも思う。とまれ、私は、このような藤原から、その生前・没後にわたり、多くのことを学んだ。それを幸運に、そして誇りに思う者である。

この書は、シンガポールの英獄から釈放帰国早々の昭和二十二年から約一年をかけて書かれ、その後、しまい込まれていたものを、昭和四十一年に原書房が公刊し八版を重ねたのち廃刊。ついで番町書房から『大本営の密使』として再出版の後廃刊、そして昭和五十九年に振学出版から原名『F機

関』として再々出版されていたものである。

一方、海外では、南山大学教授・明石陽三氏により英訳されたものが香港のハインマン・アジア社から出版された。その書をもとに改めて取材した米国のジョイス・レブラ氏が『ジャングルの盟約』、英国のルイス・アレン氏が『日本軍が銃をおいた日』、インドのK・K・ゴーシユ氏が『インド国民軍』と、それぞれに題して英文で著述・紹介し、さらにインドネシアのプスタカ・シナル・ハラパン社よりマレー語版が出されている。

前回の出版から二十八年、藤原没後二十六年にして、この書がここに改めて出版されることを何よりも嬉しく思うものだが、ただ昔を懐かしむのではなく、まさに明治維新時代に匹敵するであろう近未来の前に、世界に雄飛する若者たちが、この書を読み、なにがしかの力を得て欲しい、と切に希うものである。

富澤 暉（とみざわ ひかる）

東洋学園大学客員教授・元陸上幕僚長

(1) 忍び哭き

「俺は果たして国賊であろうか。どう考えてみてもア号（南方攻略戦）作戦には賛成出来ない。国破れて何の英霊ぞ。」

今しも重要会議から帰って来たばかりのN少佐は私をつかまえて、盛んに「国破れて何の英霊ぞ!!」の言葉を繰り返すのであった。その充血した眼からは大粒の涙がぽた／＼と流れ落ちている。昭和十六年秋の候である。ドイツ軍は疾風枯葉をまくの勢を以てモスコー或はレニングラードに切迫しつつあって、之に呼應するかのように我が精鋭は北満へ、東満へと集中されており又南部佛印に進駐した部隊は営々として南方作戦の準備を進めていた頃である。

この頃参謀本部部内に於ては主戦派に対して未だ尚反対を唱える者が相当あった。N少佐も真剣な自重派の一人である。その当時、部内に於てはひそ／＼と次の様なことが語られつつあった。

「日本が佛印、支那大陸より撤兵すればアメリカは北支の特殊権益も認め、解決も再開すると謂うんだが、東條は英靈に対して申し訳ないといって頑張っているそうだ。」

「支那事変解決の方途無き今日、英、米と事を構えてその結果一敗地に塗れたならば満洲、朝鮮はおろか、日本本国自体があぶないではないか。元も子もなくなるのだ。三千年の歴史をどうするんだ!!」

恐らく、四十年前の日露戦争役前に於ても「ロシア討つべし」に関して迂余曲折の破瀾があったことであろう。静に眼を閉ずれば伊藤公や児玉大将等の悲痛極まりなかった心事が胸底に浮んで来る。児玉参謀次長が遣米特使金子伯に、

「こん度の戦争に勝たんが為に私は着の身着のままの軍服で、兵の宿る寝台に赤毛布を引っ冠って寝て既にここで三十日も作戦計画をして居るのであるが、まあどうにか五分五分迄行くだらう。しかし五分五分では解決がつかぬから四分六分にしようと思ってこの両三日、非常に頭を痛めている……」

と答えたことや、山本海軍大臣が同伯に、

「先づ日本の軍艦は半分沈める。人も半分殺す。その代り残りの半分以上を以てロシアの軍艦を全滅させる。私はこう云う見当をつけている。」

と答えた当時の切迫緊張の光景が走馬灯の如く眼底に映じて来るのである。今!!中国、英、米、「ソ」連を前にして人々は議論をつくしつつある。日本国今日の運命を担い立つ三宅坂の陸軍統帥部は文字通り敲肅極まりない空気によって掩われて居た。

かかる場合如何に論争が繰り返されようとも結局は、最高指導者層の「主観」で凡ての方策は最後の断を下されるのである。東條大将が好んで用いた「靖国の英霊に済まぬ」の言は究極するところ剣を佩びた俄か政治家連によって支持されない筈はなかった。慎重論者、非戦論者は「国賊だ。」「卑怯者だ。」「敗戦主義者だ。」といともあつけなく罵倒され、封殺されてしまうのである。

N少佐の慟哭の原因はここにある。祖国明日の運命を想いつつ之を富嶽の安きに

置かんとするの至誠衷情に於ては誰にも劣らぬものと自負し自信しながらも滔滔たる奔流には抗し難かった。慟哭はやがて忍び哭きとなり遂には同調に変わり、協力奉仕となり粉骨碎身の御奉公へと転じてゆく外はなかったのである。「己れの信ぜざるものへの奉仕」の苦行に身を焼き心を痛めた者は只単に自由主義者や英米通のみではなかった。お膝元の帷幄の中にも此れ等の人々が多数居ったのである。

日本が敗れ去って既に五年有半。N少佐は未だにソ連の何れかの地に於て抑留生活が続けつつある。或は一生帰らぬかも知れないと伝える人もある。彼は如何なる感慨を以て祖国の運命を眺めているであろうか!!

N少佐も個人、私も個人、そして此れ等が構成する大本営陸軍部なるものも巨大な個人に外ならない。国家も亦無形の大巨人と化するのである。ここに「個人」と「個人」との闘争―妥協―調和が生れ又逃避の道も存在して来るのである。全的な国家乃至は世界の歴史は個人の意思を認めつつ又反対に之を無視蹂躪しつつ進展されて行く。

「全的個」「個的全」!!この全と個との「調和」こそは人類史上の最重大事と謂っている。若し「個人」の人生観、世界観、戦争観等が抽象的な巨人である国家の主張なり要求なりに合致し得たならば其の人はその限られた期間内丈けに於てでも幸福であるのだが、そうでない場合が頗る多い。

民族の運命を賭けられた太平洋戦争に対する個人の態度―奉仕要領、協力要領、反対の立場、等々の―は全く千差万別であつたであらう。N少佐の如きは最も悲しい一つの例として私の胸に刻されている。「悠久の大義に殉ずる」としてアジアの各地に散華した特攻隊の若櫻の人々の「心」も亦千差万別であつたことは疑う余地もない。この何年間日本人は一人の例外もなく「苦しい個人」であつたことが今更乍ら深く思われてくるのである。ただ例外ありとするならば日本民族の一員でありながらこの数年間の戦争を「対岸の火事」として見得ることの出来た人々である。私は今この人達の「鉄の心」を深き興味と驚異とを以て凝視しつつある。

戸部 良一先生研究発表

テーマ：大東亜共栄圏と中国

❖ 戸部 良一 先生のご経歴

京都大学大学院法学研究科政治学博士課程単位取得満期退学後、防衛大学校講師、同大学人文社会科学科国際関係学科教授、その後、国際日本文化研究センター教授兼ねて総合研究大学院大学教授等歴任後現在、帝京大学文学部史学科教授、また、戦略研究学会会長を務めている。

著書：『ピースフィーラー 支那事 変和平工作の群像』論創社・1991年

『日本の近代（9）逆説の軍隊』

論創社・1998年

『日本陸軍と中国―「支那通に見る夢と蹉跌」―』

講談社・1999年

『外務省革新派―世界新秩序の幻影』

中公新書・2010年

その他著書・論文多数。

「大東亜共栄圏と中国」

帝京大学 戸部良一

「大東亜共栄圏と中国」という問題を考えるにあたって、最初に留意すべきは、大東亜共栄圏に含まれた東南アジアと東アジアとの違いである。東南アジア諸国・諸地域は、タイを除いて、独立国ではなかった。その点で、日本の武力によって、欧米植民地から「解放」された地域であった。だが、東アジアはこれと異なる。東アジアでは、朝鮮と台湾が日本の植民地であり、大東亜共栄圏に含まれたからといって、「解放」が約束されたわけではない。満洲国は、名目的には独立国であっても、事実上、日本の保護国にほかならなかった。この実態も、大東亜共栄圏の形成によって実質的に変化したわけではない。また、中国は独立国であり、その点では日本による「解放」の対象とはなり得なかった。

中国内部の状況はさらに複雑かつ多様である。まず、重慶政権や延安政権の支配地域のように、日本のコントロールが及ばない地域があった。次に、日本のコントロール下にある地域、すなわち南京政権の支配地域（1940年3月までの臨時政府、維新政府、蒙疆政権それぞれの支配地域を含む）があった。さらに、どちらの支配下にもない広大な地域もあったと考えるべきだろう。

南京政権の支配地域は実質的には日本の保護下にあり、日本軍の占領下にあったとも言っても過言ではない。この点では、満洲国、さらには東南アジアの日本軍占領地域との共通性があったと考えられよう。他方、中国の主要3政権のうち、重慶政権と延安政権は日本と交戦しており、この点は東南アジア諸地域と異なっている。戦争末期まで、東南アジアで日本と戦っていたのは、現地の政権ではなく、あくまで欧米の植民地宗主国だったからである（大戦末期のビルマを除く）。もうひとつ付け加えておかなければならないのは、中国の3政権の支配地域の一部、あるいはどの政権にも属さない地域の一部が、戦場だったことである。これは、朝鮮・台湾、満洲国と異なり、東南アジアの一部と共通する部分である。

要するに、「大東亜共栄圏と中国」を考える場合、その対象となる地域は、日本のコントロール下にある地域、満洲国と南京政権支配地域だけである、ということを確認しておく必要がある。重慶政権と延安政権は対象外とされよう。

もうひとつ最初に確認しておくべきは、意図・動機と、理念と、結果・実績とを峻別する

ことが重要だということである。日本の中国に対する行動の動機や意図が奈辺にあったか、つまり侵略の意図があったかどうかということは、ここでは問わないことにしよう。まず問題とすべきは理念である。中国との関係を考える場合、理念として問題とされるのは支那事変段階での「東亜新秩序」であり、大東亜戦争開戦後の所謂「対支新政策」と「大東亜共同宣言」であろう。

ここで重要なのは、理念がいかに高邁であっても、それに実績が伴わなければ、その理念の説得力、アピールは色あせてしまうということである。理念の正しさや普遍性を問うことに加えて、その理念に基づいて実践されたはずの結果すなわち実績がどうであったかを明らかにしなければ、その理念の妥当性、正当性を実証したことにはならないだろう。

したがって、この報告では、理念の下に実践された結果、実績を考察し、それを「大東亜共栄圏と中国」というテーマを扱う手がかりとして提供したい。

【資料】

○「昭和十三年十一月三日の政府声明に際し近衛総理大臣ラジオ放送」

[前略]今や広東陥落に引つゞいて支那内地の心臓漢口も亦我有に帰し、近代支那の全機能を支配する七大都市の全線を包容する龐大な地区、即ち所謂中原は全く日本軍の掌中にあるのであります。中原を制するものは即ち天下を制す、蔣政権は事実上於て一地方政權に転落し終つたのであります。[中略]

今や支那を如何様に処理するとも、その鍵は全く日本の手にあるのであります。然し乍ら、我日本の真に希望する所のものは支那の滅亡にあらずして支那の興隆に在るのであります。支那の征服にあらずして支那との協力にあるのであります。日本は、東洋人としての自覚に目醒めたる支那国民と相携へて、真に安定せる東亜の天地を築かんことを欲するものであります。実に支那の民族的情熱を認識し、支那の独立国家としての完成を必要とすることに於て日本程切実なるものはないのであります。

等しく東亜に相隣する日本と満洲と支那との三大国が各自の個性を存分に生かしつゝ、東亜保全の共同使命の下に固き結合をなすべき関係にある事は正に歴史の必然であります。然るに日支両国の間に於ける此の理想の実現が国民政府の誤れる政策の為に阻止せられたる事は独り日本のみならず全東亜の為に遺憾の極であります。抑々国民政府の政策の基調は、歐洲大戦後の反動期に於ける一時の風潮に便乗したる浅薄のものでありまして、此は断じて支那国民本来の良知良能に根差したるものではなかつたのであります。殊に政權維持の為には手段を選ばず、支那の共產化並に植民地化の勢を激成して顧みなかつた事は、新支那建設の為に身命を賭して戦ひたる幾多憂国の先輩に対する反逆であると云はなければなりません。これ日本が東亜に於ける二大民族が同文相搏つの悲劇を演ずるを欲せざるに拘らず、猶且蔣政權打倒の為に戈を執つて起つに至りました所以であります。

日本は今や支那の覚醒を望んで止まざるものであります。支那に於ける先憂後樂の士は遂に支那をして本来の道統に立帰らしめ、更生支那を率ひて東亜共通の使命遂行の為に蹶起すべきであります。既に北京、南京には更生の氣運脈々たるものあり、又蒙疆は蒙古復興の氣が漲つて居るのであります。五千年の長き歴史を通じ幾度か世界文化史上に炬火を点じたる支那民族は、其の偉大性を發揮し、新東亜建設の大業を分担する事により、世界文化に新たなる光明を齎し、祖先に恥ぢざる歴史を残すべきであります。国民政府と雖も、此の支那民族本来の精神に立帰り、従來の政策と人的構成とを改め、全く生れ更りたる一

政權として支那再建に來り投ずるに於ては、日本は固より之を拒むものではないのであります。

世界各國は又此の東亞に於ける新狀勢の展開に対し、明確なる認識を持つべきであります。從來支那の天地が帝國主義的野心に基づく列強角逐の犠牲となり、常にその平和と獨立とを脅威せられつゝありしことは、歴史に徴し明白であります。日本は今日以後かくの如き事態に対し根本的修正の必要を認め、正義に基づく東亞の新平和体制を確立せん事を要望するものであります。[中略]

實に現下の世界に必要なは、真に公正なる均衡の上に平和を築くことであります。過去の諸原則が事實上、不均衡なる原狀の維持を鉄則とし固定化する所にあつたことは否むべくもありませぬ。聯盟規約の如き國際條約がその權威を失墜した事は、實に此の不合理にその根本原因があるのであります。國際正義をして一個の美文たるに止まらしめず、通商、移民、資源、文化等の人間生活の各部門に亘り之を綜合したる見地に立脚し、現實に即応しつゝ歴史の發展に併行する新平和体制が創造せらねばならぬのであります。而して以上の諸條件を完備することが、現下の一般危機を克服する唯一の手段であることを確信するものであります。[中略]

今や日本國民は肅然襟を正して自らに課せられたる責任を直視せねばなりませぬ。東亞諸國を聯ねて、真に道義的基礎に立つ自主的連帶の新組織を建設する任務が、如何なる意義を有し、如何なる犠牲を求め、如何なる用意を必要とするかに就て、徹底せる理解を持ち断じて認識を誤ることがあつてはならないのであります。もし漢口広東の攻略を以て一轉機として泰平の時代が直に到來するが如き思想を抱く者ありとせば、かくの如きは今次事變の重大意義を理解せざるものにして、天下之以上の危険はないのであります。新しき東亞の建設を担保すべき日本は、其の國民生活の全分野に於て新しき創造の時代に入つたのであります。この意味に於て、真の戦は今始つたのであります。真に偉大なる歴史的國民たらんが爲めに、吾々は上下一致固き信念と決意とを以て、内外の整備建設に邁進しなければならぬのであります。

○「大東亞戦争完遂ノ為ノ対支新国策ニ関スル宣伝及指導方針」(1943.1.4 連絡會議了解)
第一、方針

一、國民政府参戦ヲ以テ日支間局面打開ノ一大轉機トシ専ラ國民政府ノ政治力ヲ強化スルト共ニ重慶抗日ノ根拠名目ノ覆滅ヲ図リ真ニ更新支那ト一体戦争完遂ニ邁進スルノ帝國国策ニ即応シ

- (一) 更新支那ノ戦争協力ノ促進
- (二) 國民政府政治力ノ強化
- (三) 重慶抗日根拠名目ノ覆滅

ヲ目標トシ併セテ大東亞諸民族等ノ対日信賴感ノ誘発等努メテ対外的効果ヲ収ムルコトヲ期シ宣伝ヲ強化ス

二、日本国民ノ間ニ前記国策ノ趣旨徹底セシムル様国論ヲ指導ス

第二、要領

一、国民政府ノ参戦ハ帝国ノ懲慙セルモノニ非スシテ中国国民ノ総意ニ出テタルモノナルコトヲ闡明ス〔以下略〕

二、米英ノ桎梏ヲ脱シ新中国ヲ建設スル為ニハ日本ト同甘共苦戦争ヲ完遂スル外途ナキコトヲ認識セシムル如ク宣伝ス

三、国民政府ノ政治力強化助成ノ為帝国ノ執ルヘキ諸方策ノ実施ニ伴ヒ帝国ノ公正ナル態度ヲ闡明シ特ニ中国民衆ヲシテ帝国ノ日支提携ニ対スル誠意ヲ信頼セシムル如ク宣伝ス 但シ支那側ヲシテ徒ラニ望蜀ノ念ヲ生セシメサル如ク留意スルモノトス

四、重慶側抗日ハ日支提携ノ根本精神ニ則ル兩國新關係ノ展開ニ依リ其ノ根柢名目ナカリシコト愈々明白トナリタルコトヲ認識セシムル如ク宣伝ス

五、〔略〕

六、大東亞諸民族ニ対シ今次対支措置ニ於テ実証セラレタル大東亞建設ニ対スル帝国ノ誠意ヲ認識セシムルト共ニ米英ノ压迫下ニ在ル其ノ他諸民族ヲシテ帝国ノ真意ヲ認識セシメ惹テ其ノ反米英意識ノ覚醒昂揚等対外的効果ヲ挙クルニ努ム

尚之カ為敵国側ヲシテ大東亞戦ヲ以テ人種戦トシ枢軸陣營攪乱ヲ企図セシムルカ如キ間隙ヲ生セシメサル様留意スルモノトス

七、〔略〕

八、日本国民ノ間ニ今次対支措置ハ区々タル權益等ニ拘泥スルコトナク大乘的ニ日支局面ヲ打開シ真ニ更新支那ト一体トナリ米英ニ対スル共同戦争ヲ完遂スル為必要ナル自主的措置ニシテ特ニ大東亞諸民族ノ結集ヲ図リ其ノ綜合戦力ヲ積極的ニ増強セントスルモノナルコトヲ徹底セシム

九、〔略〕

備考（総理注意ニ依リ）

満洲国ノ参戦ハ予想セス

○「東條内閣総理大臣談」（1943.1.4 連絡会議了解）

〔前略〕大東亞ヲ本然ノ姿ニ還サントスル大東亞十億ノ民ノ心ヲ無視シ、専ラ自国ノ為東洋ヲ制覇セントスル米英ノ野望ニ抗シ、帝国ト志ヲ同シウシテ、東亞積年ノ禍根ヲ芟除シ、新シキ大東亞ヲ建設シ以テ世界平和ニ寄与セントシテ、茲ニ中華民國国民政府ハ米英ニ宣戦スルニ至ツタノテアル〔中略〕

帝国ハ、此ノ豪壯ニシテ前途ノ光明ニ満テル大戦争ノ途上ニ於テ本日中華民國国民政府ノ此ノ新シキ発足ノ雄姿ニ接シタノテアル。此ノ秋ニ当リ帝国カ敢然トシテ新事態ニ即応スル日華ノ關係ヲ新ニ樹立シ、新中国カ速カニ其ノ建設ヲ完整スルト共ニ大東亞ノ一員トシテ、大東亞民族共同ノ目的タル大東亞戦争完遂、大東亞新秩序建設ノ大事業ニ参加シテ、遺憾ナク貢献シ得ル如ク、愈々日華同志ノ交リヲ深クセントスルハ、素ヨリ当然ノコトテ

アル。即チ中華民國ニ於ケル一切ノ帝国專管租界ノ還付、上海共同租界、厦門共同租界及北京公使館区域回收ノ承認、治外法權ノ撤廃、在支敵産ノ処理等各般ニ亘リ好意ヲ尽サンコトヲ決意シ、直ニ其ノ措置ニ出テタ次第テアル [以下略]

笹島 雅彦先生研究発表

テーマ：大東亜共栄圏の諸問題

❖ 笹島 雅彦 先生のご経歴

早稲田大学政経学部政治科卒、読売新聞社入社、社員勤務の間、米国ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院を修了しMA修得、同社では政治、外報部を経て北京特派員を務める。その後、政治部兼ねて解説部に勤務し、調査研究本部研究員となる。この間、米国カリフォルニア大学バークレー校ジャーナリズム大学院客員講師を務め、更に、財団法人日本国際問題研究所特別研究員も兼務する。また、九州大学法学院客員教授、大阪大学大学院国際公共政策研究科非常勤講師、名古屋大学大学院法学研究科非常勤講師等多彩な学究活動に従事する。現在、読売新聞社調査研究本部主任研究員として外交・安全保障問題を担任している。なお、毎週土曜日の読売新聞特集「昭和時代」の編集執筆は同氏が主担当している。

著書：『憲法改正』（中央公論新社・2004年）

『対テロリズム戦争』（中公新書ラクレ 2001年）

『An Alliance for Engagement』

THE HENRY L. STIMSON CENTER 2002年

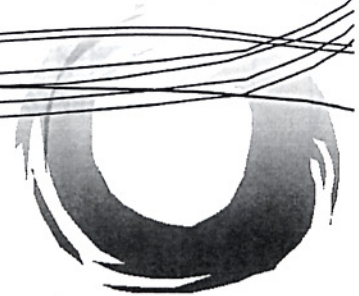
その他著書・論文多数。

大東亜共栄圏の諸問題

2月27日（金）

読売新聞調査研究本部主任研究員

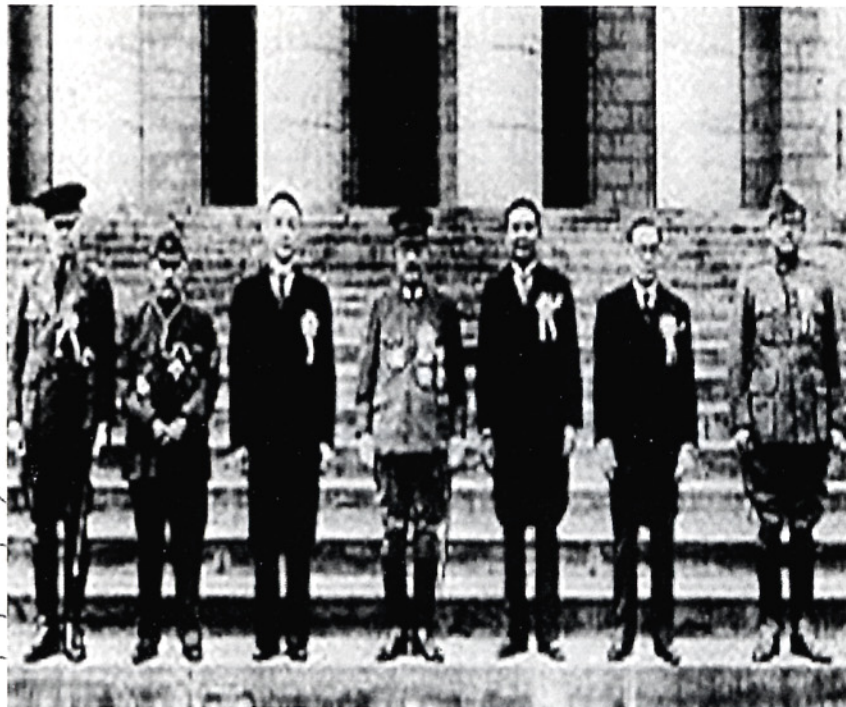
笹島 雅彦



甦る大東亜会議

大東亜会議

(1943年11月5～6日・東京)

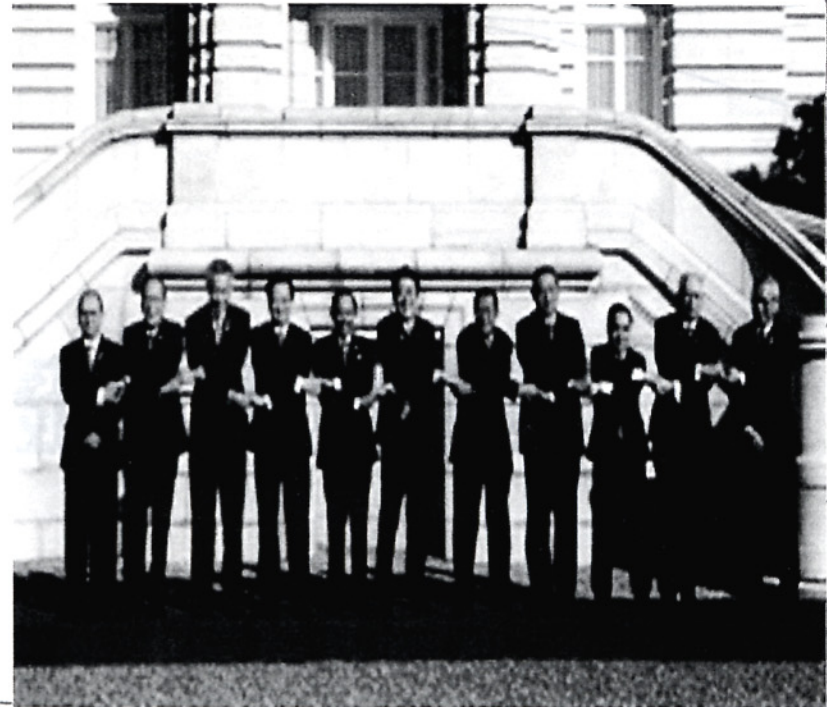


日・ASEAN特別首脳会議

「平和と安定のパートナー」

(2013年12月14日・東京赤坂の迎賓館)

(2003年12月11～12日・小泉内閣時代)



あいまいな戦争目的

- 「自存自衛」のためか、「大東亜共栄圏」のためか。
- 東条英機首相、「開戦」の方針決定を天皇に報告（1941年11月2日）

天皇「戦争の大義名分をいかに考えるや」

東条「目下、研究中でありまして、いずれ奏上致します」



政府・軍内部の意見分裂

- 海軍＝「自存自衛」→米国の石油禁輸措置で、「やむにやまれず立ち上がる」
- 陸軍＝「自存自衛」多数派→「支那事変完遂のためには百年戦争もあえて辞せざるを得ざる」
- 外務省・東郷茂徳外相＝南部仏印から北部撤兵案を主張、対米戦争反対→外交交渉難航→ハル・ノート
- 重光葵外相＝大東亜省設置に反対、大東亜会議開催のために奔走
- 東条首相兼陸相「大東亜共栄圏が基本だからね」
- 佐藤賢了陸軍省軍務局軍務課長「大東亜共栄圏」



帝国国策遂行要領

(1941年11月5日・御前会議)

- 両論併記

「帝国は現下の危局を打開して、自存自衛を完し、大東亜の新秩序を建設するため、この際、対米英蘭戦争を決意」

- 陸海軍バラバラの作戦計画

海軍「大海令一号」＝自存自衛・短期決戦

陸軍「大陸令五六四号」＝自存自衛と大東亜秩序建設・長期持久戦

宣戦詔書と大本営政府連絡会議

- 「米国及英国ニ対スル」宣戦詔書（12月8日）
「帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為・・・」
- 大本営政府連絡会議（12月10日）
戦争の呼称を「大東亜戦争」と決定
- 東条内閣閣議（12月12日）
支那事変と対米英戦争を合わせて「大東亜戦争」と呼称する
- 内閣情報局発表（同日）

大東亜新秩序建設を目的とする戦争。アジア諸国における欧米の植民地支配の打倒を目指す。

東条英機の戦後述懐

- 「武力行使の動機は自存自衛」だった。
- 戦争開始以後は「大東亜政策の実践に努めた」
- 南進の最終目標＝蘭印（オランダ領インドネシア）

宣戦詔書から戦争の対象としてはずれる
蘭印攻撃開始（1942年1月から）



解放戦争か、侵略戦争か

- 現実政治における思想・イデオロギーの役割を考える
- 大東亜共栄圏：欧米諸国の植民地支配から東アジア東南アジアを解放し、日本を盟主とする共存共栄の新たな国際秩序建設を目指した、第2次大戦における日本の構想



発想の起源

- 第1次近衛内閣声明「東亜新秩序」

(1938年11月3日、12月22日)

- ◆ 抗日容共政策に固執する国民政府壊滅
- ◆ 日満支3か国連帯共同防共の達成
- ◆ 東亜における国際正義、新文化の創造、経済結合の実現

- 第2次近衛内閣「基本国策要綱」

(1940年7月26日)

- ◆ 皇国の国是は八紘を一字とする肇国の大精神
- ◆ 皇国を核心とし、日満支の強固なる結合を根幹とする大東亜の新秩序を建設するにあり

松岡洋右外相ラジオ談話



- 世界を四つのブロック構造（米、露、西欧、東亜）に分け、指導国家が指導する。
- 東亜ブロック（日満支を中核）の完成を目指す
- ナショナリズムを超越し、世界国家に至る



東条首相の構想（1943年段階）

- 満州国、中華民国（汪兆銘政権）、ラオス王国＝傀儡政権
- 英領マラヤ、蘭印＝日本領に編入（1943年5月31日・大東亜政略指導大綱＝発表せず）
- シンガポール→昭南特別市に改称
- ビルマ国（自治政府存在）独立承認（同年8月1日）フィリピン第二共和国（同年10月14日）
- 仏印進駐＝ヴィシー政権の植民地支配を承認

大東亜共同宣言（7か国参加）



- 大東亜会議（11月4～6日・帝国議会）
- インド＝チャンドラ・ボースがオブザーバー参加。日本は大東亜共栄圏に組み込まず。
- 大東亜戦争の完遂
- 米英の桎梏より解放
- 自存自衛を全う
- 共存共栄の秩序建設



大西洋憲章（1941年8月9～12日）に対抗

チャーチル英首相とルーズベルト米大統領がニューファンドランド島沖停泊の英戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」で会談、8項目で合意した戦後世界構想。

1. 合衆国と英国の領土拡大意図の否定
2. 領土変更における関係国の人民の意思の尊重
3. 政府形態を選択する人民の権利
4. 自由貿易の拡大
5. 経済協力の発展
6. 恐怖と欠乏からの自由の必要性
7. 航海の自由の必要性
8. 一般的安全保障のための仕組みの必要性

* 第3条は、ナチス・ドイツ占領下の欧州にのみ適用。



動機＝侵略か、結果＝解放か

- 結果論

南方の資源獲得という動機をあいまいにしたまま、アジア諸民族が解放されたと主張する結果論。

- 結果論の有資格者

- ◆ 敗戦後、インドネシア義勇軍に加わり、対蘭独立戦争に参加→約2千人の日本兵戦死

- ◆ 岩畔豪雄・陸軍少将＝陸軍中野学校設立（1938年）、インド国民軍（INA）支援

終戦段階で理想欠落

- 東南アジアの人々を蔑視
辻政信・陸軍大佐「土人を可愛がれ」
大本営政府連絡会議決定「現住土民」
- 戦争目的は「自存自衛」、「大東亜共栄圏」消える。「日本は最後になって大東亜共栄圏の理想など架空のものだったと自ら告白した」（半藤一利）
- ◆ 本土決戦を決めた御前会議（1945年6月8日）
- ◆ 終戦の詔書（同年8月15日）



いつから引き返せなかったのか

- ポーツマス条約（1905年）以降、日米関係悪化→朝河貫一「日本の禍機」（1909年）で機会均等・中国独立。対米敵視政策警告。
- 満州事変（1931年）～東条内閣成立
- ◆ ヘンリー・スティムソン国務長官「不戦条約（1928年）、9か国条約（1922年）という国際法違反である」と警告。
- ◆ 日清・日露戦争と大東亜戦争「開戦詔書」の違い＝国際法に関する表現欠落。
- ◆ 東条英機陸相「戦陣訓」（1941年1月）
「生きて虜囚の辱めを受けず」

これからの日本

- ASEAN諸国との関係強化
- 日本にとって望ましい東アジアの戦略環境構築
- 国際法の遵守を強調



第二次近衛内閣 基本国策要綱

昭和 15 年 7 月 26 日 閣議決定

世界は今や歴史的一大転機に際会し数個の国家群の生成発展を基調とする新なる政治経済文化の創成を見んとし、皇国亦有史以来の大試練に直面す、この秋に当り真に肇国の大精神に基く皇国の国是を完遂せんとせば右世界史的発展の必然的動向を把握して庶政百般に亘り速に根本的刷新を加へ万難を排して国防国家体制の完成に邁進することを以て刻下喫緊の要務とす、依って基本国策の大綱を策定すること左の如し

基本国策要綱

一、根本方針

皇国の国是は八紘を一字とする肇国の大精神に基き世界平和の確立を招来することを以て根本とし先づ皇国を核心とし日満支の強固なる結合を根幹とする大東亜の新秩序を建設するに在り之が為皇国自ら速に新事態に即応する不拔の国家態勢を確立し国家の総力を挙げて右国是の具現に邁進す

二、国防及外交

皇国内外の新情勢に鑑み国家総力発揮の国防国家体制を基底とし国是遂行に遺憾なき軍備を充実す皇国現下の外交は大東亜の新秩序建設を根幹とし先づ其の重心を支那事変の完遂に置き国際的大変局を達観し建設的にして且つ弾力性に富む施策を講じ以て皇国国運の進展を期す

三、国内態勢の刷新

我国内政の急務は国体の本義に基き諸政を一新し国防国家体制の基礎を確立するに在り之が為左記諸件の実現を期す

1. 国体の本義に透徹する教学の刷新と相俟ち自我功利の思想を排し国家奉仕の観念を第一義とする国民道德を確立す尚科学的精神の振興を期す
2. 強力なる新政治体制を確立し国政の総合的統一を図る
 1. 官民協力一致各々其の職域に応じ国家に奉公することを基調とする新国民組織の確立

2. 新政治体制に即応し得べき議会制度の改革
3. 行政の運用に根本的刷新を加へ其の統一と敏活とを目標とする官場新態勢の確立
3. 皇国を中心とする日満支三国經濟の自主的建設を基調とし国防經濟の根基を確立す
 1. 日満支を一環とし大東亜を包容する皇国の自給自足經濟政策の確立
 2. 官民協力による計画經濟の遂行特に主要物資の生産、配給、消費を貫く一元的統制機構の整備
 3. 総合經濟力の發展を目標とする財政計画の確立並に金融統制の強化
 4. 世界新情勢に対応する貿易政策の刷新
 5. 国民生活必需物資特に主要食糧の自給方策の確立
 6. 重要産業特に重化学工業及機械工業の画期的發展
 7. 科学に画期的振興並に生産の合理化
 8. 内外の新情勢に対応する交通運輸施設の整備拡充
 9. 日満支を通ずる総合国力の發展を目標とする国土開發計画の確立
4. 国是遂行の原動力たる国民の資質、体力の向上並に人口増加に関する恒久的方策特に農業及農家の安定發展に関する根本方策を樹立す
5. 国策の遂行に伴う国民犠牲の不均衡の是正を断行し厚生的諸施策の徹底を期すると共に国民生活を刷新し真に忍苦十年時難克服に適應する質実剛健なる国民生活の水準を確保す

米國及英國ニ對スル宣戰ノ詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕力陸海將兵ハ全カヲ奮テ交戰ニ從事シ朕力百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕力衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總カヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕力拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國力常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト覺端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕力志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尚未タ牆ニ相闌クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御 名 御 璽

昭和十六年十二月八日

大東亞戰爭終結ノ詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現狀トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑ト帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戰已ニ四歲ヲ闕シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各ト最善ヲ盡セルニ拘ラス戰局必スシモ好轉セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尙交戰ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク舉國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總カヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御 名 御 璽

昭和二十年八月十四日

清国ニ対スル宣戦ノ詔勅

天佑ヲ保全シ万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝国皇帝ハ忠実勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ清国ニ対シテ戦ヲ宣ス朕カ百僚有司ハ宜ク朕カ意ヲ体シ陸上ニ海面ニ清国ニ対シテ交戦ノ事ニ従ヒ以テ国家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ苟モ国際法ニ戻ラサル限り各々権能ニ応シテ一切ノ手段ヲ尽スニ於テ必ス遺漏ナカラムコトヲ期セヨ

惟フニ朕カ即位以来茲ニ二十有余年文明ノ化ヲ平和ノ治ニ求メ事ヲ外国ニ構フルノ極メテ不可ナルヲ信シ有司ヲシテ常ニ友邦ノ誼ヲ篤クスルニ努力セシメ幸ニ列国ノ交際ハ年ヲ逐フテ親密ヲ加フ何ソ料ラム清国ノ朝鮮事件ニ於ケル我ニ対シテ著著鄰交ニ戻リ信義ヲ失スルノ挙ニ出テムトハ

朝鮮ハ帝国カ其ノ始ニ啓誘シテ列国ノ伍伴ニ就カシメタル独立ノ一國タリ而シテ清国ハ毎ニ自ラ朝鮮ヲ以テ屬邦ト称シ陰ニ陽ニ其ノ内政ニ干涉シ其ノ内乱アルニ於テロヲ屬邦ノ拯難ニ籍キ兵ヲ朝鮮ニ出シタリ朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ兵ヲ出シテ變ニ備ヘシメ更ニ朝鮮ヲシテ禍乱ヲ永遠ニ免レ治安ヲ将来ニ保タシメ以テ東洋全局ノ平和ヲ維持セムト欲シ先ツ清国ニ告クルニ協同事ニ従ハムコトヲ以テシタルニ清国ハ翻テ種々ノ辞柄ヲ設ケ之ヲ拒ミタリ帝国ハ是ニ於テ朝鮮ニ勸ムルニ其ノ秕政ヲ釐革シ内ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセムコトヲ以テシタルニ朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルモ清国ハ終始陰ニ居テ百方其ノ目的ヲ妨碍シ剩ヘ辞ヲ左右ニ托シ時機ヲ緩ニシ以テ其ノ水陸ノ兵備ヲ整ヘ一旦成ルヲ告クルヤ直ニ其ノカヲ以テ其ノ欲望ヲ達セムトシ更ニ大兵ヲ韓土ニ派シ我艦ヲ韓海ニ要撃シ殆ト亡狀ヲ極メタリ則チ清国ノ計図タル明ニ朝鮮國治安ノ責ヲシテ歸スル所アラサシメ帝国カ率先シテ之ヲ諸獨立國ノ列ニ伍セシメタル朝鮮ノ地位ハ之ヲ表示スルノ條約ト共ニ之ヲ蒙晦ニ付シ以テ帝國ノ權利利益ヲ損傷シ以テ東洋ノ平和ヲシテ永ク担保ナカラシムルニ存スルヤ疑フヘカラス熟々其ノ為ス所ニ就テ深ク其ノ謀計ノ存スル所ヲ揣ルニ實ニ始メヨリ平和ヲ犠牲トシテ其ノ非望ヲ遂ケムトスルモノト謂ハサルヘカラス事既ニ茲ニ至ル朕平和ト相終始シテ以テ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚スルニ專ナリト雖亦公ニ戦ヲ宣セサルヲ得サルナリ汝有衆ノ忠実勇武ニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス

御 名 御 璽

明治二十七年八月一日

露國ニ對スル宣戰ノ詔勅

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕力陸海軍ハ宜ク全カヲ極メテ露國ト交戰ノ事ニ從フヘク
朕力百僚有司ハ宜ク各々其ノ職務ニ率ヒ其ノ權能ニ應シテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力ス
ヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

惟フニ文明ヲ平和ニ求メ列國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セスシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ
國交ノ要義ト爲シ且暮敢テ違ハサラムコトヲ期ス朕力有司モ亦能ク朕力意ヲ體シテ事ニ從
ヒ列國トノ關係年ヲ逐フテ益々親厚ニ赴クヲ見ル今不幸ニシテ露國ト覺端ヲ開クニ至ル
豈朕力志ナラムヤ

帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓國
ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ清國トノ明約及列國ニ對ス
ル累次ノ宣言ニ拘ハラズ依然滿洲ニ占據シ益々其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併呑セム
トス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸セン乎韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦
素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此ノ機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恆久
ニ維持セムコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歲ノ久シキニ互リテ屢次折衝ヲ重ネシメ
タルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽
ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國力始ヨリ平和
ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レス韓國ノ安
全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレムトス事既ニ茲ニ至ル帝國力平和ノ交
渉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ
忠實勇武ナルニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御 名 御 璽

明治三十七年二月十日

小林 道憲先生研究発表

テーマ：20世紀の分水嶺

－第2次大戦終結70年－

❁ 小林 道憲 先生のご経歴

京都大学大学院文学研究科博士課程修了、福井大学教育地域科学部教授、その後、麗澤大学比較文明文化研究センター客員教授歴任後、現在、哲学者として多彩な文明論を発信。

著書：『ヘーゲル精神現象学の考察』

(理想社、1989年)

『二十世紀を読む』(泰流社・1989年)

『二十世紀とは何であった』

(日本放送会・NHKブックス・1994年)

『対論 文明のこころを問う』(麗澤大学出版会・2003年)

『歴史哲学への招待－生命パラダイから考える』(ミネル書房・2013年)

その他著書・論文多数。

20世紀の分水嶺

—第二次大戦終結70年—

小林 道憲

- 1 第二次大戦とは何だったのか
- 2 日本の植民地主義的進出
- 3 日本の反植民地主義的行動
- 4 日本の二面性
- 5 20世紀の分水嶺

今年は、第二次大戦終結七十年になる。第二次大戦とは何だったのだろうか。第二次大戦は、ヨーロッパ地域とアジア地域に分けて考えるべきであろう。ヨーロッパ地域における第二次大戦は、第一次大戦につぐヨーロッパ全体の再度の自決行為であったとも言える。しかし、アジア地域における第二次大戦は、もう少し違う様相を呈している。

確かに、第二次大戦に突入するまでの日本の中国進出、および第二次大戦での日本の行動は、ヨーロッパ諸国がアジアの各地で行なっていたのと同じような、あるいはそれ以上の日本の植民地主義的進出だったと言わねばならない。しかし、同時にまた、第二次大戦における日本の行動は、戦線の拡大とともに、ヨーロッパ列強によって形成されていた世界秩序への反逆という意味ももっていった。第二次大戦における日本の行動は、日本の植民地主義的進出であったとともに、反植民地主義的行動でもあったのである。この矛盾の転換点になったのが、日中戦争から対米英蘭戦への転換であった。

実際、第二次大戦での日本の行動は、マレー、ビルマ、インドを植民地化していたイギリス、ベトナムを植民地化していたフランス、インドネシアを植民地化していたオランダとの戦い（一部交渉を含む）に発展していった。そして、この戦いによって、日本も壊滅的打撃を受けたが、イギリス、フランス、オランダも疲弊した。このヨーロッパ諸国の疲弊とともに、大戦後、東南アジアや南アジアの諸国は独立を果たすことができたのである。

例えば、インドネシアでは、一九四二年に進出してきた日本軍によってオランダ勢力は一掃され、インドネシア国民党を率いていたスカルノやハッタを中心に独立への要求が高まり、日本は独立を承認した。大戦後復帰してきたオランダ軍も、インドネシア人民の独立戦争で示した情熱の前に撤退せざるをえなかった。ビルマでも、ビルマを脱出したアウンサンやネ・ウィンを中心に組織されたビルマ独立義勇軍が日本軍とともにラングーンに進軍、イギリス軍を一掃、日本は一九四三年にビルマの独立を承認した。そのこともあつ

て、ビルマは、一九四八年にイギリスに早期の独立を承認させることができた。インドの独立運動でも、チャンドラ・ボースやプリタム・シン、モハン・シンのように、日本軍と協力してインド国民軍をつくり、イギリス軍と戦おうとした派があった。そのこともあって、第二次大戦で疲弊したイギリスは、一九四六年、インドに完全独立を与えている。

もちろん、このアジア諸国の独立の背景には、十九世紀末以来、二十世紀の第一次大戦、第二次大戦と重ねて、長い間試みられてきた各民族の独立運動の長い歴史があった。その長い闘争の積み重ねなくして、独立はありえなかった。これと、日本の反撃、さらにヨーロッパ戦線でのヨーロッパ諸国の疲弊が連動して、多くのアジア諸国の独立はもたらされた。しかも、この独立の動きは、大戦戦後、燎原の火のようにアフリカ諸国にまで及んだ。こうして、遠く十七世紀以来二十世紀半ばまで三五〇年余り続いたヨーロッパ植民地勢力の世界支配は終焉を迎え、ヨーロッパ勢力は後退せざるをえなかったのである。

第二次大戦での日本の行動を、その前の日中戦争も含めて考えた場合、その前半部での日本の大陸進出は日本の植民地主義的進出であったが、これが直接欧米との戦いに転換し、東南アジアやインドにまで及んだとき、それは、アジアにおける植民地解放戦争という意味をもったと言わねばならない。第二次大戦における日本の行動には二面性があり、多くの矛盾したものがあつた。それは、欧米列強と同じ植民地主義的行動であつたと同時に、アジアを植民地化していた欧米列強への反撃でもあつたのである。それは、時間的にも、日中戦争では植民地主義的面が強く現われ、対米英蘭戦に至って植民地解放戦争という意味合いが強くなつてきたことにも現われている。また、空間的にも、朝鮮、台湾、中国、フィリピン、ベトナムなど、日本に近い範囲では日本の植民地主義的支配という面が強く現われ、インドネシア、マレー、ビルマ、インドなど日本よりも遠い地域では、どちらかという植民地解放戦争という意味合いが強く現われた点にも見ることができる。

十九世紀がヨーロッパの世紀であつたのに対して、二十世紀は、アメリカやソ連、日本など非ヨーロッパ諸国が抬頭してきた時代であつた。と同時に、アジア・アフリカ諸国のヨーロッパからの自立という事実も、二十世紀を特徴づける重大な出来事であつた。今から七十年前の第二次大戦が終結した一九四五年は、アジア・アフリカ諸国の自立へと向かつた世界史上画期的な年であつた。それは、二十世紀の半ばにあつて、ヨーロッパ列強の世界支配に終止符を打つたこの世紀の大きな分水嶺を形成した年だったのである。この二十世紀の分水嶺を形成する上で、日本の第二次大戦における一撃の果たした役割には無視できないものがあつたと言わねばならない。

資料

アーノルド・J・トインビー（イギリス、歴史学者）

「第二次世界大戦において、日本人は日本のためというより、むしろ戦争によって利益を得た国々のために、偉大なる歴史を残したといわねばならない。その国々とは、日本が掲げた短命な理想であった大東亜共栄圏に含まれていた国々である。日本人が歴史上に残した業績の意義は、西洋人以外の人類の面前において、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が、過去二百年の間考えられたような、不敗の神でないことを明らかに示した点にある」

（1956年10月28日、英紙「オブザーバー」）

G・バラクラフ（イギリス、歴史家）

「今世紀の歴史は、西洋がアジア・アフリカに与えた衝撃と、同時に西洋に対するアジア・アフリカの反逆という、この両者を最大の特徴としている」

「ヨーロッパ諸国の植民帝国が一九四七年以後あいついで崩壊したのは、外からの圧力と世界政局の影響によるところが大きかった。アジアでは、イギリスも、フランスも、またオランダも、一九四一年から四五年にかけて日本から受けた痛手から二度と回復できなかった」

（『現代史序説』）

クリストファー・ソーン（イギリス、国際政治史家）

「日本は敗北したとはいえ、アジアにおける西欧帝国の終焉を早めた。……一九四五年には極東戦争のまぎれもない『勝者』だったアメリカが、一九七〇年代にはある意味では、長期にわたる最大の『敗者』と見られるようになった」

（『太平洋戦争とは何だったのか』）

ブン・トモ（インドネシア、元情報・宣伝相）

「われわれアジア・アフリカの有色民族は、ヨーロッパ人に対して何度となく独立戦争を試みたが、全部失敗した。インドネシアの場合は、三百五十年間も失敗が続いた。それなのに、日本軍が米・英・蘭・仏をわれわれの面前で徹底的に打ちのめしてくれた。われわれは白人の弱体と醜態ぶりをみて、アジア人全部が自信をもち、独立は近いと知った。一度持った自信は決して崩壊しない。日本が敗北したとき、‘これからの独立戦争は自力で遂行しなければならない。独力でやれば五十年はかかる’と思っていたが、独立は意外にも早く勝ち取ることができた。…」

（昭和三十二年五月、来日し、久原房之助、佐藤栄作らに面会した時の挨拶）

アリフィン・ベイ（インドネシア、ナショナル大学日本研究センター所長）

「日本軍に占領された国々にとって、第二次世界大戦とは、ある面では日本の軍事的南進という形をとり、他面では近代化した日本の精神的、技術的面との出会いであった。日本が戦争に敗けて日本の軍隊が引きあげた後、アジア諸国に残っていたのは他ならぬ日本の精神的、技術的遺産であった。この遺産が第二次大戦後に新しく起こった東南アジアの民族独立運動にとって、どれだけ多くの貢献をしたかを認め

なければならない。日本が敗戦国になったとはいえ、その精神的遺産は、アジア諸国に高く評価されているのである。…」

（『魂を失ったニッポン』 未央社）

ククリット・プラモード（タイ、元首相）

「日本のお蔭でアジア諸国はすべて独立した。日本というお母さんは、難産して母胎をそこなったが、生まれた子供はすくすくと育っている。今日東南アジア諸国民が、米・英と対等に話ができるのは一体誰のお蔭であるのか。それは、身を殺して仁を為した日本というお母さんがあったためである。十二月八日は、われわれに此の重大な思想を示してくれたお母さんが、一身を賭して重大な決心をされた日である。われわれはこの日を忘れてはならない」

（「サイヤム・ラット」紙の主幹時代に、「十二月八日」）

チャンドラ・ボース（インド、国民軍最高司令官）

「私は、わが国民軍の兵士たちが、きたるべき戦争にどれだけ生き残るか、知りません。しかし、それは私たちには問題ではないのです。私たち個人は、生きようと死のうと、また戦争を生き抜いてインドが自由になるのをみようと、できまいと、一番重要なことは、インドが自由になる……ただ、そのことであります」

（一九四三年の東京における大東亜会議にて）

ジャワハルラル・ネルー（インド、初代インド首相）

「これら立派な若者たち（インド国民軍）の主たる動機は、インド解放への愛情であった。……かれらの日本との協力は、インド解放を促進するための手段であった。余はチャンドラ・ボース氏の独立への情熱を疑わない」

（貝塚茂樹編『民族解放の星』 講談社）

木村久夫（陸軍上等兵、シンガポールにて戦犯刑死）

「いよいよ私の刑が執行せられることになった。戦争が終わり戦火に死ななかった生命を、今ここで失うことは惜しんでもあまりあるが、大きな世界歴史の転換のもと、国家のために死んでいくのである。よろしく父母は、私が敵弾のあたって花々しく戦死を遂げたものと考えて、諦めてください。

……

私のことについては、今後次々に帰還する戦友たちが告げてくれましょう。何か便りのあるたびに、遠路ながら、戦友たちを訪問して、私の事をききとってください。私は何一つ不面目なことはしていないはずだ。死ぬ時もきっと立派に死んでいきます。私はよし立派な日本軍人の亀鑑たらずとも、高等の教育を受けた日本人の一人として、なんら恥ずるところのない行動をとってきたはずです。……」

（『きけわだつみのこえ』の中の遺書）

コメンテーター

❁池田 十吾先生のご経歴

国士舘大学政経学部政治学科卒業、同大大学院政治学研究科博士課程単位取得満期退学、ジョージタウン大学大学院留学、国士舘大学政経学部教授、モンゴル国立大学名誉教授、政治学博士。

日本危機管理学会会長

著書：『石井・ランシング協定をめぐる日米交渉』

（近代文芸社・1994年）。

『戦後日米関係の軌跡』（勁草書房・1997年）

『アメリカ外交の軌跡』（勁草書房・1997年）

『日本外交のアイデンティティ』

（南窓社・2004年）

『第1次大戦の日米関係史・国際関係論』

（有斐閣・2009年・共著）。

その他著書・論文多数。

シンポジウム終了にあたって

本日は、お忙しい中当シンポジウムへご参加頂き誠にありがとうございました。来年度は大東亜戦争の終結を巡ってシンポジウムを開催する予定ですのでご期待下さい。